

文化庁平成28年度地域の核となる美術館・博物館支援事業
児童・生徒の「思考力」を育むファシリテーター育成事業
トレーニング第一回（6/5） レポート

京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター
研究員・講師 北野諒



昨年度からの実行委員会メンバー、新たに加わった先生方、外部専門家などを含め、総勢40名弱が集まり、いよいよトレーニングプログラムがスタート。自己紹介の場面では、各々、今回のプロジェクトに向けての意気込みなどを語ってくださった。奇しくも、全メンバー合わせて、ちょうど小中学校の平均的な学級サイズの人数である。さしずめ、新学年の始まりといったところだろうか、緊張と期待が入り混じった幕開けであった。まずはこの「クラス」から、アクティブな学びを生み出していけるかどうか、プロジェクトの成否を左右すると言えるだろう。

プログラムの導入は、伊達によるレクチャー。対話型鑑賞の生まれた経緯や、ニューヨーク近代美術館（MoMA）で行われた研究などを示しながら、まずは歴史的背景を確認していった。そのなかでも、「MoMAの専門家より、学級担任がファシリテーションを担当したクラスの方が学習効果が上がった」という研究結果には、多くの先生方が興味を惹かれていたようだ。「知識量よりも、生徒との信頼関係が学びの質に寄与している」という知見は、先生方としては実感するところが大きかったのではないだろうか。これは、専門的な知識を過度に気にする必要はないという意味では、実践を大いに後押ししてくれる。しかし裏を返せば、普段からどれだけ児童・生徒と対話する環境や関係を築けているかが、そのまま問われるということ。あらためて自問させられるエピソードでもある。

レクチャーの後半ではACOPの紹介に移り、「アートとは、作品とみる人の間に起こる深淵で興味深いコミュニケーション」であるということ、そして対話型鑑賞の基本プロセスとなる「みる・考える・話す・聴く」についても触れられた。加えて、錯視画像や簡単なゲームなどを取り入れつつ、「みる・考える・話す・聴く」という活動をより詳細に検討していった。「みたいように、みてしまう」「わかったつもりが、わかってなかった」など様々な体験を通して、見落としや思い込みといった無数の盲点が確認され、非常に盛り上がりつつも身悶えするような時間だったのではないだろうか。それらの盲点を常に意識しつつ、「みる・考える・話す・聴く」ことが重要なのである。

レクチャーに続いては、岡崎がナビゲーションを担当し、実際にACOPでの作品鑑賞体験を行った。初めての対話型鑑賞となる先生方もおられ、序盤は緊張もみられたものの、徐々に意見や解釈が積み重なり、初回としてはかなり深まった鑑賞となった。レクチャーで説明された対話型鑑賞の効果を、体験として実感していただけたのではないだろうか。その一方で、「意見の根拠を的確に言語化する」ことは、実際にやってみると意外なほど難しいことに戸惑われもしたようだ。ファシリテーターとなるためには、まずは鑑賞者としての経験を積む必要があることにも、先生方は気付かれていたと見受けられる。

その後、1日の締めくくりとして、グループに分かれての振り返りを伊達が実施。今日1日の気付きや発見を、まずはグループで相談しつつ、書き出していった。次のステップでは、それらを「教わったこと」と「学んだこと」に仕分けてみようという提案が伊達からなされ、『そもそも「教わる」と「学ぶ」の違いとは?』というところからグループで考える活動になった。このように、普段は見過ごしている要素や言葉に着目し、そこから意味を解釈するというプロセスは、実はACOPと同様である。「対象や使い方をアレンジすれば、対話型鑑賞が様々な場面・教科に応用できる」という実例となる活動でもあったのではないだろうか。

振り返りのまとめとしては、「学び」をより増やすために自分が具体的に実践できることは何か? というテーマで、今後のトレーニングや学校現場での「行動宣言」を考えていただいた。伊達からも指摘があったが、このような場合、往々にして抽象的な心がけである「抱負」を書いてしまいがちである（例えば「人の意見をよく聴く」）。そうではなく、具体的に実行・検証可能な「方法」にすることが重要なのだ（例えば「人の意見の理由を聞き返してみる」）。そうすれば、検証して駄目だった場合、また別の「方法」を試すことができるし、そのプロセスを他者と共有することもできる。全体共有の場面では、多くの先生方から多種多様の「方法」を出していただいた。これからの一年、どれだけのトライ&エラーを繰り返せるか、先生方とより密な対話を積み重ねていきたいと考えている。



最後に、参加された先生方が感想用紙に記入して下さった言葉から、いくつか抜粋・紹介する。

子ども達との関係が深い学級担任が実践することで（対話型鑑賞の）効果が見られたということが、一番納得だった。日々の実践の中で、信頼関係や児童理解が深まるよう心がけることが、自分の中での宣言だ。

今日の研修の中での鑑賞はとても楽しい体験でした。見方が変わっていく快さも実感できました。こういう変容の快感を子ども達にも是非味わわせたいと思います。チームの人々と仲間になり、アンチな意見も信頼して言い合えるようになりたいと思います。この一年が楽しみになりました。

対話型鑑賞は、美術以外の教科でも効果的だと思いますが、一番は学級づくりに役立つような気がします。人間関係づくりと言ってもいいかもしれません。どんなことを発言してもバカにされないような安心感のある教室を作っていくのもってこいだと思います。そういうクラス（職場）になると、どんどん色んなことが頭に入り、学んでいけると思います。

「どう行動するか」常に自分に問いかけながら、この研修を行っていく。行動が語れないものは、実践に結びつくことなく消えていく気がしている。

（研修で）火がついたと思います。日常の忙しさの中で、消化・鎮火されぬようにしたいです。今日の講義の中で感じたのは、指示や命令ではなく、自発的に行動することの心地よさです。早速授業の中で、5分でも10分でも良いので、作品を通して語り合う活動の時間を必ずもちたいと思いました。この積み重ねの中で、子どもたちが学ぶ楽しさを感じ、火がついてくれるよう。

先生方の声からは、一方的な「教わる」姿勢でなく、まさに身をもって「学び」を実践して下さっていることが伝わってくる。一足跳びに「学びを促す」ことを考えるのではなく、まずは自らが「学ぶ」存在であること。自戒を込めつつ、そして道中を楽しみつつ、1年間のプログラムを併走していきたい。

